要掲載分として、梅堯臣の生涯とテキストについてまとめたもの、及び「魯山山行」全体について論じたものを執筆した。以下に論文を発表する十名は上記の他、学部三年宇都健夫・小山美樹・梶村永、学部研究生山崎藍、及び院生三名であるが、その専攻は、博士三年大山潔が元代の詩論、修士一年謝智芬が文言の小説、同白井澄世が近現代文学である。六朝詩を専攻する修士一年高芝麻子と、修士二年大村和人は、敢えて執筆陣に加えず、資料探しとその読解、論文のまとめ方の全般にわたって学部生の指導を担当してもらった。この他博士一年佐野誠子・修士一年田中智行・外国人研究生任秀彬・黄正謙・経済学部四年土井理恵子・法政大学文学部四年遠藤星希の諸君が、様々な形で授業に参加した。また研究室では、論文の草稿が批評を求めてしばしば閲覧に供された。これを読むことで、議論に加わった諸君も少なくない。以下の論文はこうした多くの学友の力を得て完成したものである。

梅堯臣の生涯と『梅堯臣集』の版本について

千葉　貴

一、梅堯臣の生涯について、その略歴

梅堯臣が生まれたのは北宋真宗の咸平五年（一〇〇二）である。仁宗の天聖五年（一〇二七）に結婚する。そのころ恩蔭により太廟斎郎に補され、以後は長く地方の県官を務める。三十歳頃から欧陽脩、尹洙らとの交流が始まる。「魯山山行」と関係があると考えられる欧陽脩の詩「遠山」は、陳新・杜維沫著『欧陽脩選集』（上海古籍出版社、一九八六年）によると、景祐元年（一〇三四）に作られた。銭維演、王曙から評価を受けるのもこの頃である。なお、官歴について、筧文生著『梅堯臣』（岩波書店、中国詩人選集二集三、一九六二年）と朱東潤著『梅堯臣傳』（中華書局、一九七九年）とは、明道二年（一〇三三）に彼が実際に徳興県令になったか否かについて見解を異にしている。

景祐五年（一〇三八）頃より宋と西夏との戦争が本格化したらしく、「魯山山行」が作られた時期はこれに伴う社会情勢を反映した詩が多い。

康定元年（一〇四〇）、梅堯臣は河南各地を訪れている。朱は公務によるとしているが、筧は目的には触れず「旅行」としている。梅堯臣はこの年秋に襄城（河南省）県令を解任されて（あるいは辞職して）おり、「魯山山行」は晩秋もしくは初冬の作品である。したがって、いずれにせよこの詩は彼が官職を離れた時期の作品と考えられる。

康定二年（一〇四一）以降、梅堯臣は県官に就くことはなく、地方の監税官、節度判官を務める。慶暦四年（一〇四四）、妻を喪い、また子を一人喪う。慶暦六年（一〇四六）、刁氏と再婚する。この頃より晏殊と接触する。

慶暦八年（一〇四八）、国子博士となる。慶暦十一年（一〇五一）、同進士出身を賜い、太常博士となる。至和三年（一〇五六）、欧陽脩らの推薦により、国子館直講となる。嘉祐二年（一〇五七）、欧陽脩が知貢挙となり、彼の推薦により小試官となる。試験委員として、当時無名の受験生であった蘇軾の答案を欧陽脩に推挙している。嘉祐四年（一〇五九）、「新唐書」の編纂に参加する。嘉祐五年（一〇六〇）、疫病により死亡する。

二．梅堯臣集の版本について

現在には伝わっていないが、他の文人の作品集や詩話等により存在が推定される作品集としては、『梅聖兪詩稿』、『梅聖兪詩集』（十巻本）、『梅聖兪詩集』（十五巻本）、『梅聖兪文集』（四十巻本）、『梅聖兪外集』（十巻本）、『梅聖兪別集』が挙げられる。現在まで伝わっている作品集は、朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）、筧『梅堯臣』によれば、全て六十巻本である。内容は詩五十九巻、文賦一巻で、以下の諸本がある。

①南宋紹興十年（一一四〇）刊本。紹興十年（一一四〇）本を嘉定十七年（一二二四）に重修した刊本である。②明正統四年（一四三九）刊本。③明万暦四年（一五七六）刊本。四部叢刊に影印され、現在の通行本となっている。④

清康熙四十一年（一七〇二）刊本。清道光十年（一八三〇）刊本。担当者が直接確認したのは③の四部叢刊本のみである。

今回取り上げる梅堯臣の詩については、全て『梅堯臣集編年校注』をテクストとした。

古い文献から見た魯山について

謝　智芬

魯山について、河南省あるいは湖北省にあるという二説がある。清の顧祖禹（一六三一―一六九二）が撰した『読史方輿紀要・河南六・南陽府・汝州・魯山県』[1]には、以下のような記述がある。

①魯山：在県東北十八里、山高聳、迴出群山、[2]為一邑巨鎮、縣以此名。一名露山。

魯山：県の東北十八里にある。山は高く聳え立ち、群山から突出する。一邑の大きな中心地であるので、県に魯山の名をつけた。一名は露山。

また、『読史方輿紀要・湖広一・名山』[3]では、以下のように記述される。

②大別：大別山在漢陽府城東北百歩漢江両岸。江水逕其南、漢水従西北来、会于大別之東南。（中略）山亦名翼際山、又名魯山。

大別：大別山は漢陽府の都城の東北百歩ぐらいのところ、漢水・江水（長江）両クの河の岸にある。江水はその南を流れてゆき、漢水は西北から流れてきて、大別の東南で合流する。（中略）山は、翼際山、魯山とも呼ばれる。

上述のように、魯山は二つあるが、かなり離れている。前掲・千葉貴「梅堯臣の生涯と『梅堯臣集』の版本について」によれば、「魯山山行」は、三十九歳の年、襄城（河南省）の県令を辞任した後、近くを旅した際に作ったもの